根　来　寺　坊　院　跡

1994. 3

和歌山県教育委員会
財団法人 和歌山県文化財センター

序　　文

開祖興教大師覚鑁の創建になる根来寺は、中世末期、秀吉の根来寺焼き討ちにより大きな打撃を受けたものの、今なお歴史的なたたずまいの中、その地下に往時の痕跡を残し根来寺坊院跡とし、とくに、中世日本の宗教・政治・経済史を語る極めて重要な遺跡としてひろく知られており、本県教育委員会もその保存について積極的に取り組んでいるところであります。

根来寺坊院跡の保存問題は、県農林水産部が紀ノ川北岸の農業基盤整備事業の一環として着手した広域営農団地農道整備事業、いわゆる大規模農道の建設が根来寺地区に及んだことに始まり、本県教育委員会では昭和51年度より農道建設予定地の事前発掘調査を実施したところ、古代末から近世にかけてのおびただしい遺構・遺物が検出され、開祖興教大師覚鑁以来の根来寺興隆の実態が明らかになりました。

このため、文化財保護担当部局として農道建設及びその他の開発事業から根来寺坊院跡の保存を図るための資料を作成すべく、昭和55年度より10ケ年にわたる第一期の発掘調査事業を終了し、平成元年度末に調査成果と根来寺坊院跡の保護について提案したところであります。

さらに、史跡指定等保存範囲と保存方法策定の基礎資料作成のため平成２年度より５ケ年計画で根来寺坊院跡の最も重要な６地点を選び、第二期の発掘調査を実施中であります。

本年度は密厳院跡の発掘調査を実施したところ瓦窯跡の発見など貴重な新知見を得ることが出来ました。ここに、発掘調査の概要報告書を刊行しますが、本報告書が根来寺坊院跡の研究資料のみならず宗教史・政治史等日本歴史全体の研究資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後に、事業実施に当たり多大のご協力をいただいた宗教法人根来寺関係各位並びに当該発掘調査に携われた関係者のご努力に敬意と感謝の意を表します。

平成６年３月31日

和歌山県教育委員会
教育長　西川時千代

例　　言

1．本書は、国庫補助事業、平成５年度根来寺坊院跡発掘調査の概要である。

2．発掘調査は、財団法人和歌山県文化財センターが、和歌山県教育委員会より受託を受け、実施した。

3．調査組織については下記のとおりである。

和歌山県教育委員会

参事（課長事務取扱）	武部　吉宏
文化財課副課長	高橋　　彬
埋蔵文化財課課長補佐	吉田　宣夫
文化財課文化技術班長	辻林　　浩
文化財課文化技術班主任	藤井　保夫
文化財課文化技術班主査	山本　高照

財団法人和歌山県文化財センター

事務局長	鍋島　伊津夫
事務局次長	菅原　　正明
埋蔵文化財課長	松田　　正昭
埋蔵文化財課技師	村田　　弘

調査委員

岡田　英男、　羯磨　正信、　巽　三郎、　都出　比呂志

藤沢　一夫　（各氏とも和歌山県文化財保護審議会委員）

4．本書の遺物実測図と遺物図版に付した番号は一致する。また、遺物の実測図は原則として1/4で掲載したが銭など特別なものについては別の縮尺を用いている。これらには個々にスケールを付した。ただし、遺物写真については任意の大きさである。

5．本書では、遺構の略称としてＳＫ－土坑、ＳＶ－石垣、ＳＤ－溝、ＳＡ－土塀を使用している。

6．本書に掲載した遺構実測図の北方位は、すべて座標北（国土座標第Ⅵ系）を示す。当該地では真北は座標北に対して23分東偏し、磁北は６度30分西偏している。また、調査ならびに本書で使用している地区割り方法は国土座標第Ⅵ系を基準に設定したものであり、具体的には本文中に示している。レベル高はＴ．Ｐ（東京湾標準潮位）＋の数値を使用しているが、本書ではＴ．Ｐ＋を省略して記述している。

7．本書の遺物実測、トレース、図および図版作成には谷口　敦子、玉井　朱美、村上敏子、吉野　勢津子の助力を得た。記して謝意を表する。

8．調査、並びに本書の執筆・編集は文化財センター技師村田　弘が担当した。

目　　次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　調　　査……3
　1　Ⅰ区の調査……4
　　A　Ⅰ区の遺構……4
　　B　Ⅰ区の遺物……8
　2　Ⅱ区の調査……10
　　A　Ⅱ区の遺構……10
　　B　Ⅱ区の遺物……13
　3　Ⅲ区の調査……17
　　A　Ⅲ区の遺構……17
　　B　Ⅲ区の遺物……18

挿図・写真目次

第1図　遺跡の範囲……1
第2図　調査区位置図……3
第3図　調査区付近古絵図……4
第4図　Ⅰ区遺構平面図・東壁土層図…5・6
第5図　埋桶実測図……7
第6図　SE－01実測図……7
第7図　Ⅰ区出土遺物実測図……9
第8図　瓦窯実測図……10
第9図　Ⅱ区遺構平面図・石垣実測図…11・12
第10図　Ⅱ区出土遺物実測図(1)……15
第11図　Ⅱ区出土遺物実測図(2)……16
第12図　土塀基礎実測図……17
第13図　Ⅲ区出土遺物実測図……18
第14図　Ⅲ区池平面実測図……19・20
写真1　根来寺山内全景……2

図　版　目　次

図版1　1．Ⅰ区調査前遠景(北東から)
　　2．Ⅰ区調査前(北東から)
図版2　1．Ⅰ区全景(南から)
　　2．Ⅰ区全景(北から)
図版3　1．Ⅰ区中央部(北から)
　　2．Ⅰ区SD－16・SD－25(南から)
図版4　1．Ⅰ区SD－06(南から)
　　2．Ⅰ区SE－01(北から)
図版5　1．Ⅰ区埋桶・埋甕(西から)
　　2．Ⅰ区埋桶(北から)
図版6　1．Ⅱ区調査前(北から)
　　2．Ⅱ区調査前(南から)
図版7　1．Ⅱ区全景(北から)
　　2．Ⅱ区SK－02(北東から)
図版8　1．Ⅱ区SK－02細部(南から)
　　2．Ⅱ区SK－08(東から)
図版9　1．Ⅱ区SV－01(西から)
　　2．Ⅱ区SV－02(南西から)
図版10　1．Ⅱ区瓦窯(南から)
　　2．Ⅱ区瓦窯(西から)
図版11　1．Ⅲ区調査前(東から)
　　2．Ⅲ区全景(東から)
図版12　1．Ⅲ区土塀基礎物(東から)
　　2．Ⅲ区北壁土層(南西から)
図版13　Ⅰ区包含層・遺構出土遺物
図版14　Ⅰ・Ⅱ区包含層・遺構出土遺物
図版15　Ⅱ区包含層・遺構出土遺物
図版16　Ⅱ・Ⅲ区包含層・遺構出土遺物

Ⅰ はじめに

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は和歌山県の北部、紀ノ川北岸の山間の地に所在する。平安時代の末期、覚鑁によって開創された寺院であり、中世を通して教学の隆盛を誇った。

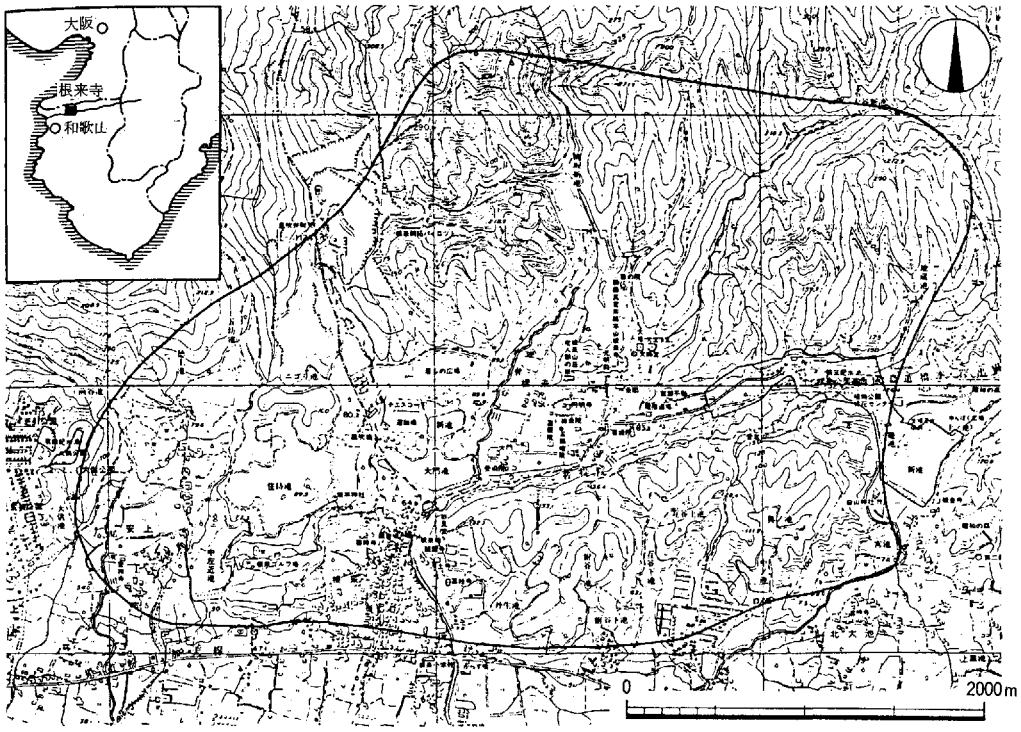
最盛期の15・16世紀には山内に二千とも三千ともいわれる院坊堂舎が建ち並び、当時の日本の中でも最も裕福で豪華な寺院であったと言われている。

それとともに戦国時代末期には多数の僧兵を擁し、また、いちはやく鉄砲の導入をはかるなどして軍事的にも勢力を増大させ、畿内の戦局に多大な影響を与えたことが知られている。

このように繁栄を誇った根来寺も天正13年（1585年）豊臣秀吉による根来攻めにあい全山が焼き打ちされ、大塔や大師堂など二、三の建物を残してすべて灰燼に帰してしまった。

その後、江戸時代に入ると紀州藩の庇護もあり徐々に再興されるが往時の勢力にはほど遠い状況であった。

この根来寺にはじめて発掘調査の手がはいったのは、昭和51年のことで、山内を縦貫する広域農道の建設工事が契機であった。この工事に先立ち緊急発掘調査を実施した結果、天正（1585）の兵火という実年代が確定できる極めて貴重な遺構・遺物が多数検出され、



第1図　遺跡の範囲

わが国における中世研究の最も標識的な遺跡であることが判明した。

このため県教育委員会ではとりあえず大規模農道の建設中断を要請するとともに、第一次10ケ年計画を策定し、昭和55年度より平成元年度まで山内各所において発掘調査を実施した。

この10年にわたる調査の結果、当初想像されていた以上に遺構の残りは良く遺物の量も多いこと、また谷の奥深くまで寺域が展開するなどその範囲の広いことも確認された。その他、山内における立地条件の差異により建物の規模や様相に違いが見出しえること、山内の南側を画する山の上には防御施設が設けられていたことなどが判明した。また、出土した多量の遺物の整理・分析を通して当時の山内の消費の在り方や流通の一端が明らかにされるなど中世後半の根来寺の輪郭がおぼろげながらも把握できるようになってきた。

以上のような調査成果を受け、県教育委員会では平成２年度より新たに第２次５ケ年計画に着手した。本計画は根来寺坊院跡遺跡を保存し活用することを目的とする史跡整備にむけての調査であり、そのため山内の重要な地点５ケ所について調査を計画的に進めているものである。その４年次目に当る本年度は、根来寺創建期の蜜厳院の実態をあきらかにするため旧蜜厳院跡を中心に発掘調査を実施した。

写真１　根来寺山内全景

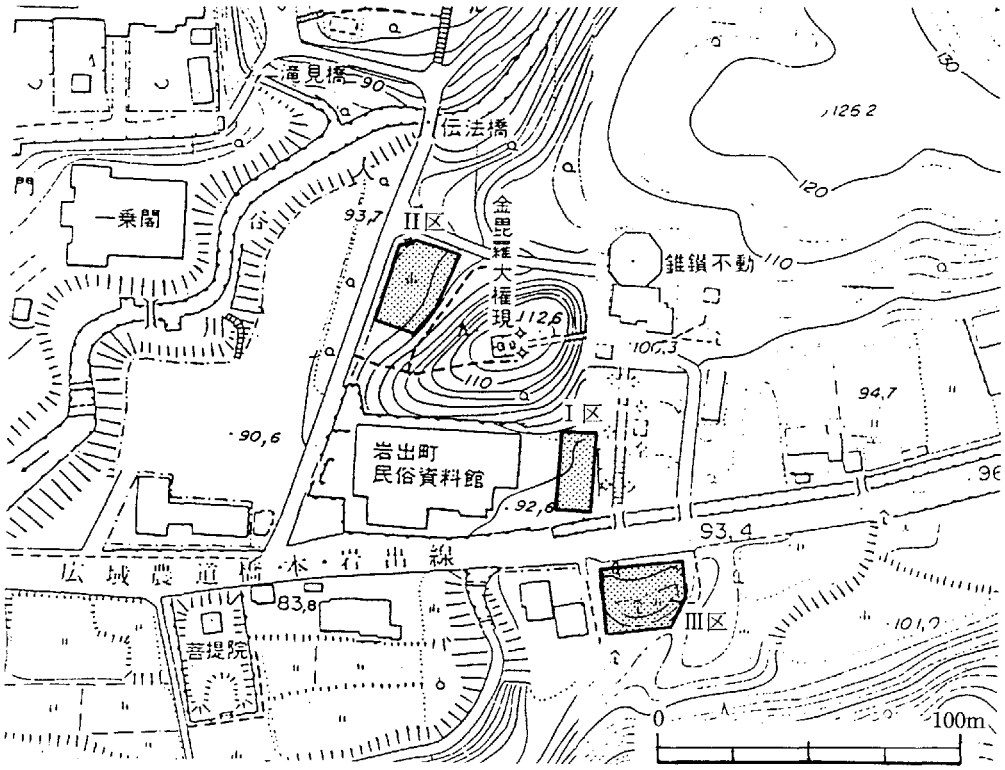
Ⅰ 調　査

今回の調査対象である蜜厳院は、もともと根来寺の開祖である覚鑁の私坊として高野山において営まれていたものであるが、正応元年（1288）座主頼瑜が高野山からこの地に移り住んだとき、大伝法院とともに移されたもので、円明寺などとともに初期根来寺の伽藍を構成する主要な院のひとつである。

紀伊名所図會によれば、境内には錐鑚不動堂・求聞持堂・多寶搭・昆沙門堂鐘楼など数多くの建物・施設があったといわれており、その境内の大きさが想像される。

この蜜厳院の具体的な位置については不明であるが、古絵図などから現有の不動堂の南側周辺一帯と考えられるものである。このため今回の調査では下図に示すようにこの地域に３ケ所の調査区を設定し調査にあたった。

調査の具体的な成果については、次章において詳しく述べることにするが、結論的に言えば今回の調査において旧蜜厳院に係ると思われる具体的な遺構は検出することができず、その実態を明らかにするには至らなかった。ただ、このことは、当地を蜜厳院跡と考えることを否定するものではなく、むしろ山内の中心地に近いことからその後の頻繁な立替えなどにより削平、改変を受けた可能性が高いものと思われる。



第２図　調査区位置図

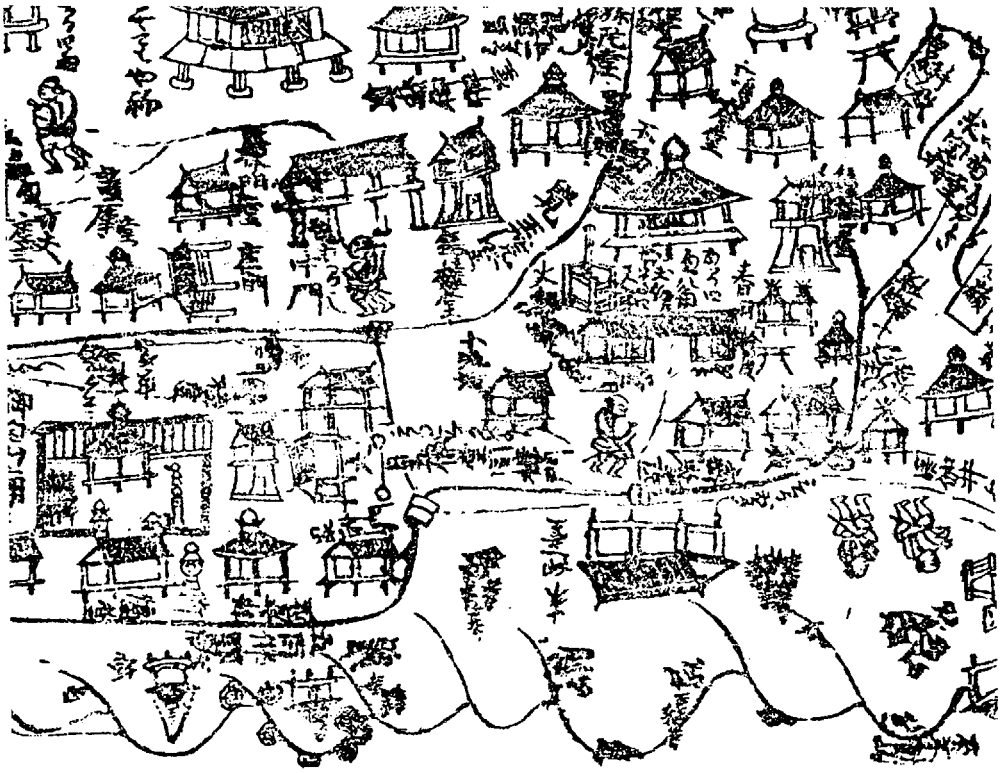
1．Ⅰ区の調査

A．遺　構　Ⅰ区は現存する錐鑽不動堂の南およそ60mに位置しており、調査面積は約200㎡である。調査区の西隣30mほどのところに町立の民俗資料館が建てられているが、この部分については昭和62年に建物の建設に伴い発掘調査がなされており、中世から近世までの遺構・遺物が数多く検出されている。

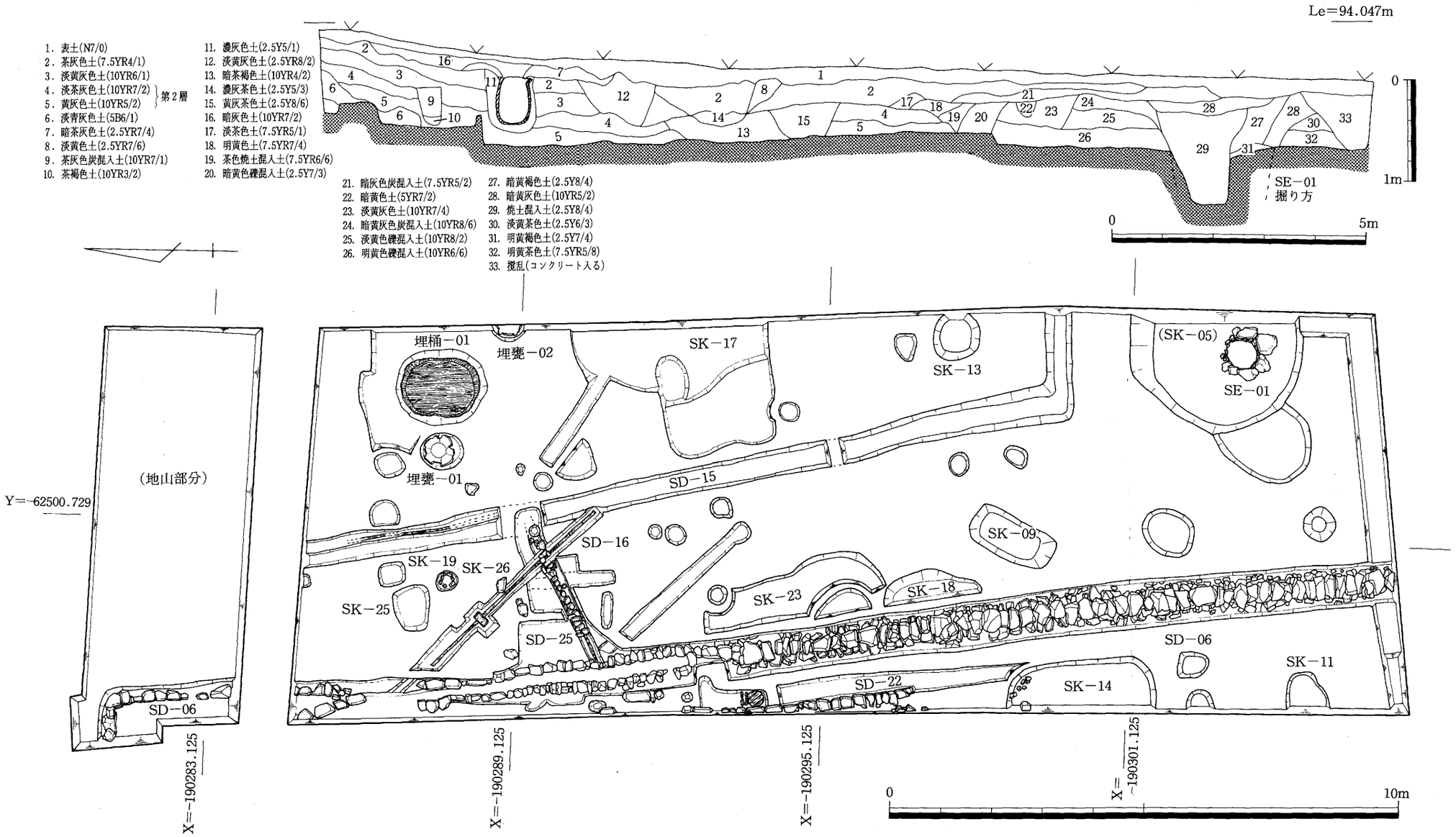
今回の調査においては、中世の残りは悪く、15世紀代の遺物を含む包含層を確認したものの中世前半、13世紀代まで遡る瓦器などの遺物については皆無の状態であった。また、中世の遺構としては石組の井戸のみで、その他はすべて近世、それも18世紀中頃以降の新しい時期のものであった。

石組の井戸(SE-01)は、直径60cmとやや小振りのもので、使われている石も最上段のものを除けば15cm前後と小さく、これらの石はほぼ垂直に積み上げられている。中は中空状態であった。涌水と狭小なため最深部まで調査できなかったが、確認規模で深さ2.5mを測る。遺物はまったく出土していないが、近世の瓦溜めにより北側の一部が壊されていることや、検出面が近世の遺構面より一段低いことなどから中世、天正の兵火以前のものと考えている。

石組の溝(SD-06)は、幅25cm、深さ20cmほどで、側石は一段である。南側部分について



第３図　調査区付近古絵図



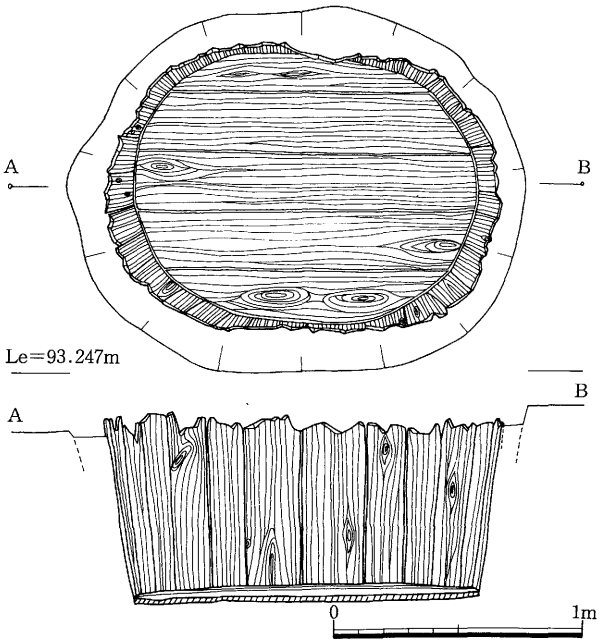
第4図　Ⅰ区遺構平面図・東壁土層図

は蓋石を被せており、暗渠となっていたもようである。全体に石も大きくしっかりとした造りで、一見中世のものと思われたが、溝内の最下層の砂質土から近世の遺物が出土している。なお、この溝は北側の山裾部でほぼ直角に西側に曲がっていくことを確認している。その他、溝には幅40cmほどの素掘りのもの(SD-15)や10cm前後の石を投げ入れた暗渠排水(SD-25)がある。これらの溝についても、出土遺物から近世のものと判断される。

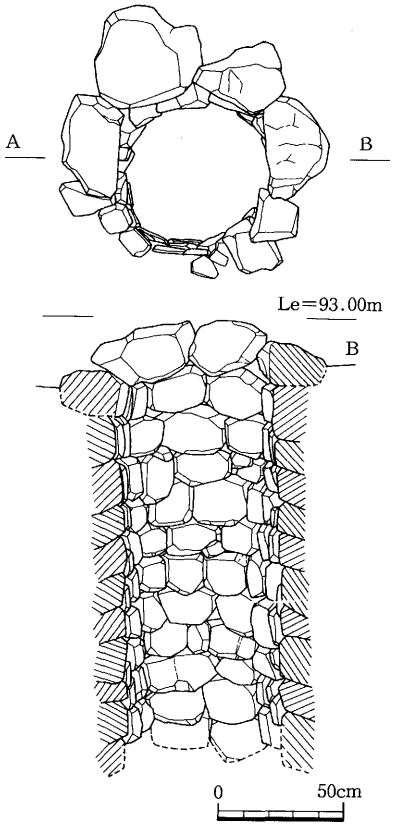
また、上水道として使用されていたと思われる竹製の導水管を2条検出した(SD-16・19)。この竹製の導水管は、枕と称している木製のジョイントにより竹をつないでいくもので、これまでの山内の調査でも多く検出されている。奈良県などでは中世まで遡るものも確認されているようであるが、根来寺においては近世以降に出現する遺構といえ、本例についても近世のものである。

埋桶は長径1.6m、短径1.2mの楕円形で、深さは確認規模で約70cmを測る。板材の厚さは3cmと厚く、材質は松と思われる。埋土の最下層には30cmにわたって粘質の灰黒色土がみられ、この中から瓦のほか19世紀前半のものと考えられる磁器片が何点か出土している。用途については不明だが、この埋桶の傍らで同時期のものと思われる埋甕が検出されており、あるいはこれとセットをなす可能性も考えられよう。

建物については、具体的に復元することはできなかったが、柱跡と考えられる根石のつまった土坑(SK-25など)をいくつか検出しており、この付近に建物を想定することができよう。



第5図　埋桶実測図



第6図　SE-01実測図

B．遺　物

a．第１層出土の遺物　第１層としているのは、表土直下から近世の遺構面までの厚さ30cmほどの包含層である。実際には、土層図にも示したように、複雑な堆積状況をなしているが、ここでは一括して取り上げた。この層には、中世の遺物も若干まじっているが大部分が近世のものである。このうち(1)は、伊万里の染め付けの瓶である。（２・３）も伊万里の製品で、体部には草花文が描かれている。いわゆるくらわんか茶碗と称されているものであり、時期的には18世紀中葉から末にかけてのものであろう。(4)は唐津の刷毛目文様の皿である。茶灰色の釉が体部下半まで浸けがけされており、内底部は蛇の目状に削りとられている。（５～７）は灯明皿で、いずれも淡黄色の釉が内面に施され、細かな貫入が入っている。焼成は良く、半磁器質である。（８～13）も灯明皿であるが、これらは土師質で、内面のみ柿色を呈し、ニス状の透明釉が施されている。

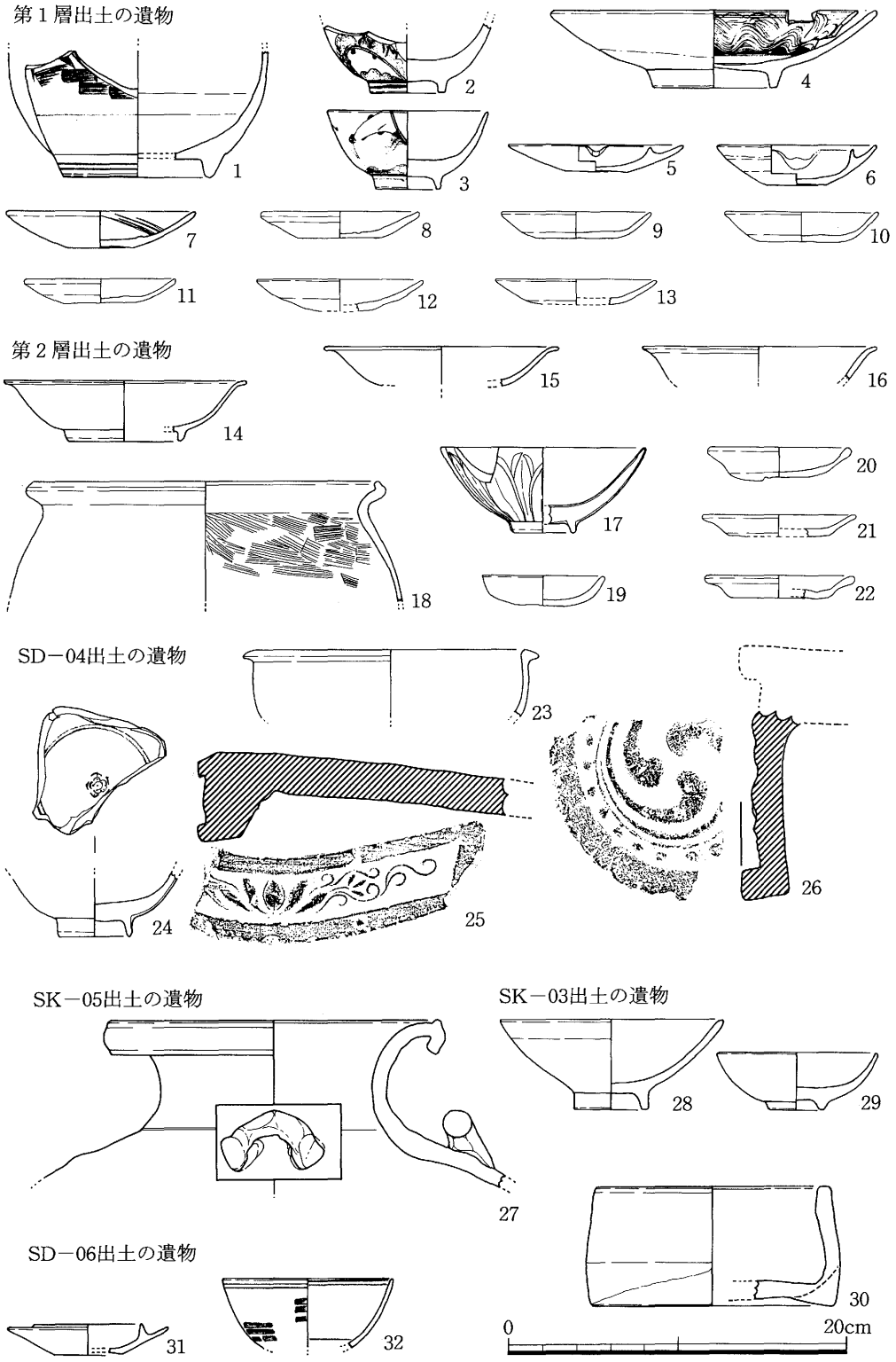
b．第２層出土の遺物　第２層としている包含層は、黄灰色のよく引き締まった土で、この層からは近世の遺物はまったく出土しておらず、量的には少ないもののすべて中世のものである。（14～16）は、いずれも中国製の白磁の皿である。色調はやや灰色味を帯びた白色を呈しており、一部に釉切れが見られるなどやや粗雑な感がある。

(17)は中国製の青磁の碗である。口径12cmほどとやや小振りのもので、全体に草緑色の釉が施されており、畳付け部のみ釉を削り取っている。体部外面には粗い片切彫りにより蓮弁文が施されている。(18)は土師質の鍋となるもので、口縁部は「く」の字状に外反し、端部を丸く納めながら斜め上方に引き出している。口縁部付近はていねいなナデ調整、内面には横方向のハケ調整が施されている。全体に茶褐色を呈し、体部外面には煤の付着が認められる。（19～22）は土師質の皿で、このうち(19)は体部から口縁にかけて内弯気味に立ち上がるタイプのものであり、その他のものは口縁端部がヨコナデにより肥厚している。後者のタイプの皿は16世紀の根来寺においてもっとも普遍的なものといえる。

c．SD-04出土の遺物　(23)は国産陶器の鍋である。淡い灰緑色を呈する。(24)は伊万里の染付け青磁である。内底面には圏線が巡り、中心部にはコンニャク印判による簡略された五弁花が押されている。18世紀中葉の製品であろう。（25・26）はともに近世の軒丸、軒平瓦である。

d．SK-03出土の遺物　(28)は肥前系の陶器の碗である。淡い枇杷色のガラス質の釉がかけられており、内底面に３箇所の目跡が認められる。(29)は伊万里の白磁の皿で、内底面の釉は蛇の目状に掻きとられている。(30)は備前の水差しである。

e．SD-06出土の遺物　(31)は半磁器質の灯明皿である。(32)は染付けの碗で、体部に算木の文様が施されている。胎土および釉から瀬戸の製品の可能性を考えている。



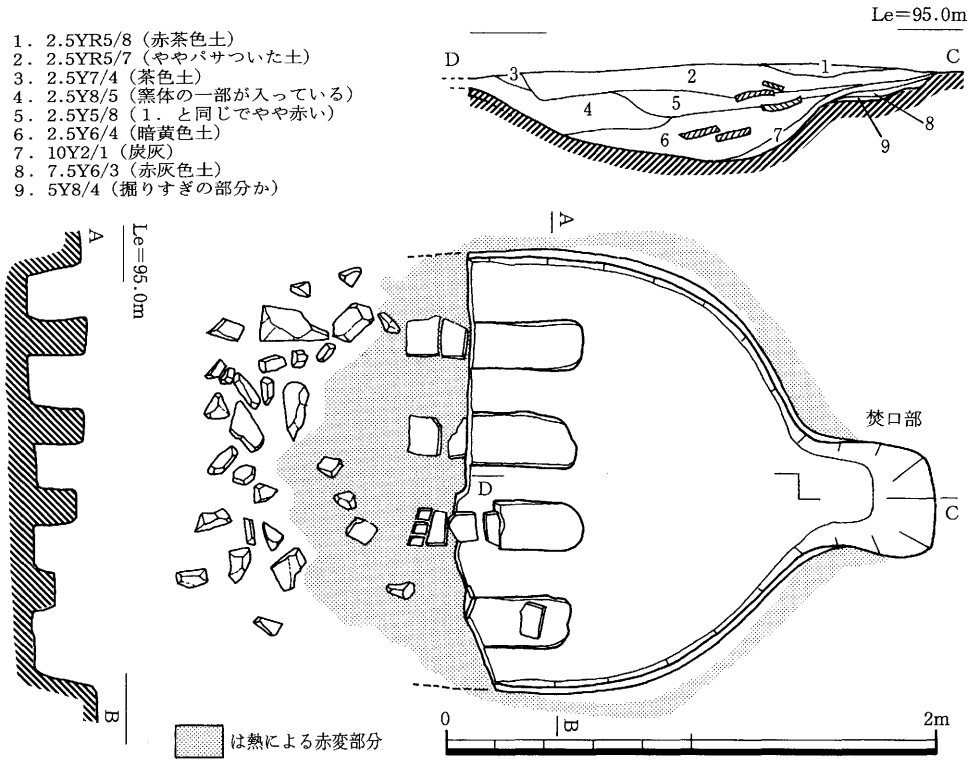
第７図　Ⅰ区出土遺物実測図

2．II区の調査

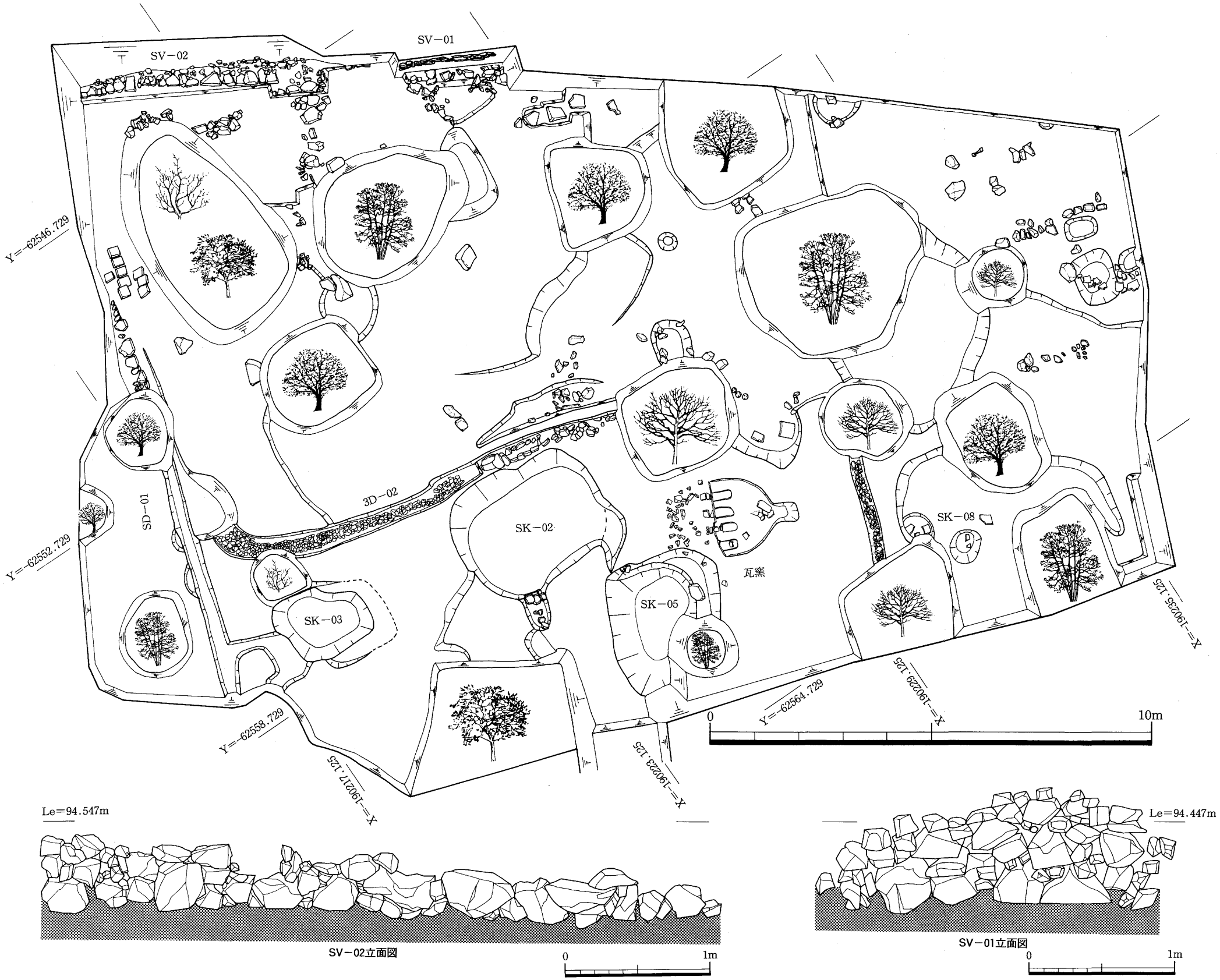
A．遺　構

II区は、錐鑽不動堂の西側およそ50m、現在の本堂への参道の東側に隣接する地点である。地形的には小高い山の西裾部にあたっており、戦前までの一時期相撲場として使われていたそうである。調査面積は330㎡ほどであるが、調査区内には桜や杉などが植えられており、調査は、これらの樹木の間隙を縫って行わざるを得なかった。ここではＩ区とは逆に近世の遺構は少なく、天正の兵火に係る時期の遺構が多い状況であった。検出した遺構には、中世のものとして石垣・土杭・溝、近世のものとして瓦窯などがある。

このうち特筆すべき遺構としては瓦窯があげられよう。これまでの長い調査の中で窯跡が検出されたのは、本例が初めてのことである。この窯は幅約1.8m、長さについては焼成部が削平されているため不明だが、おそらく3.5mほどの規模になるものと思われる。焚口部は、幅約40㎝ほどで、燃焼部は、一段低くなっており、焼成部に向かって斜めに立ち上がっていく。分炎柱は、幅20㎝、４列の構造となっており、これらは粘土と瓦を交互に積み重ねて作られている。壁面も粘土が貼られているが、窯内の熱により厚さ３㎝ほどにわたって瓦状に固く焼き締まっている。さらにその外側も熱により赤く変色している。削平された焼成部と考えられる部分には10㎝前後の角礫が散らばっているが、これらの石



第８図　瓦窯実測図



第９図　Ⅱ区遺構平面・石垣実測図

は窯を造るにあたって地面を掘り込んだ後、防湿のため意識的に置かれたものと考えられよう。時期的には、出土している瓦から近世のものと判断される。また、単独で存在することや、規模が小さいことなどから差し替え用の瓦を焼いた臨時の窯であったものと考えている。

SK-08 調査区東南隅、前述の瓦窯の焚口付近で検出した径3m、深さ60cmほどの不整形の土坑である。図版8－2に掲載した写真のように、この土坑からは瓦片がまとまって出土しており、この中に窯体の一部と思われるものもまじっていることから瓦窯の灰原と考えられよう。

SK-02 3m×2mほどの隅丸の方形を呈し、深さは50cmほどを測る。北東隅近くに幅50cm、長さ60cmほどの突き出た部分があり、この部分と本体部とは15cm前後の石を積んで仕切られている（図版8－1参照)。土坑の壁は、かなりの高温により長時間熱せられたもようで赤く変色している。埋土は、炭を含む焼土がぎっしりとつまっている状況であった。この中からは天正の兵火に係る時期の遺物がまとまって出土している。

SV-01・02 ともに調査区の東端で検出した石垣である。山際に沿って造られているところから両者とも敷地の東側を画する石垣であったと判断されよう。ただ両者は方向がわずかにことなっており、時期のちがうものと考えている。若干手前に築かれているSD-01の覆土に天正の兵火によると思われる焼土がまじっており、近世の遺物をまったく含まないことからこれを兵火に係る時期、SD-02はそれ以前のものと解している。

その他、調査区の南東隅では備前の大甕の破片が多く出土しており、遺構は確認できなかったが、この付近に大甕を複数個埋設した甕ピットの存在していた可能性が高いものと考えている。

B．遺　物

a．表土出土の遺物 表土からは近世の遺物もいくらか出土しているが、大部分は中世、16世紀後半の遺物であった。このうち近世のものとしては、(33)の灯明皿、(34・35)の陶器の碗、大皿がある。灯明皿は半磁器質の非常によく焼き締まったもので、淡黄色の釉が内面と口縁端部下半までかけられている。碗(34)は唐津の製品で、灰白色の釉が厚くかかり、内底面のみ蛇の目状に釉が削りとられている。

(36・37)は中国製の染付けの皿である。口縁部が外反するタイプで、16世紀後半のものといえよう。(38)も同じく中国製の染付けである。底部のみの出土であるが、おそらく碗となるものと思われる。底部の中心部がやや上げ底気味に盛り上がっている。(39)は中国製の青磁の盤である。淡草緑色の釉が厚くかかり、外底部の高台付近の釉が幅2cmほどの広さで輪状に削り取られている。(40～44)は中国製の白磁の皿である。(45)は備前の壺で、

淡い茶色を呈し、肩部に雑な波状文が施されている。

b．第1層出土の遺物　第1層についても表土と同じように中世の遺物が主体であるが、わずかに近世の遺物がまじって出土している状況であった。(46)は唐津の製品で鉢になるものと考えている。高い高台をもち、暗緑色の釉が内面と外面の高台近くまで施されている。

染付け製品(48～53)は、中国製のもの(48・51・52・53)と国産のもの(49・50)に大別できる。前者は中世の製品であるが、後者は近世のものである。国産のものでは、(49)は伊万里の製品であるが、(50)は胎土や釉の発色状態などから瀬戸の製品と考えられる。

(54・55)は中国製の白磁の皿である。前者は通例のものといえるが、後者は緑灰色を呈し、焼成も甘い。また、高台も通例のものに比べて幅が広く、全体にぼてっとした感じである。おそらく中国でも南部の雑窯で生産された製品かと思われる。(56・57)は備前の大甕・広口の壷である。ともに16世紀代の製品といえよう。

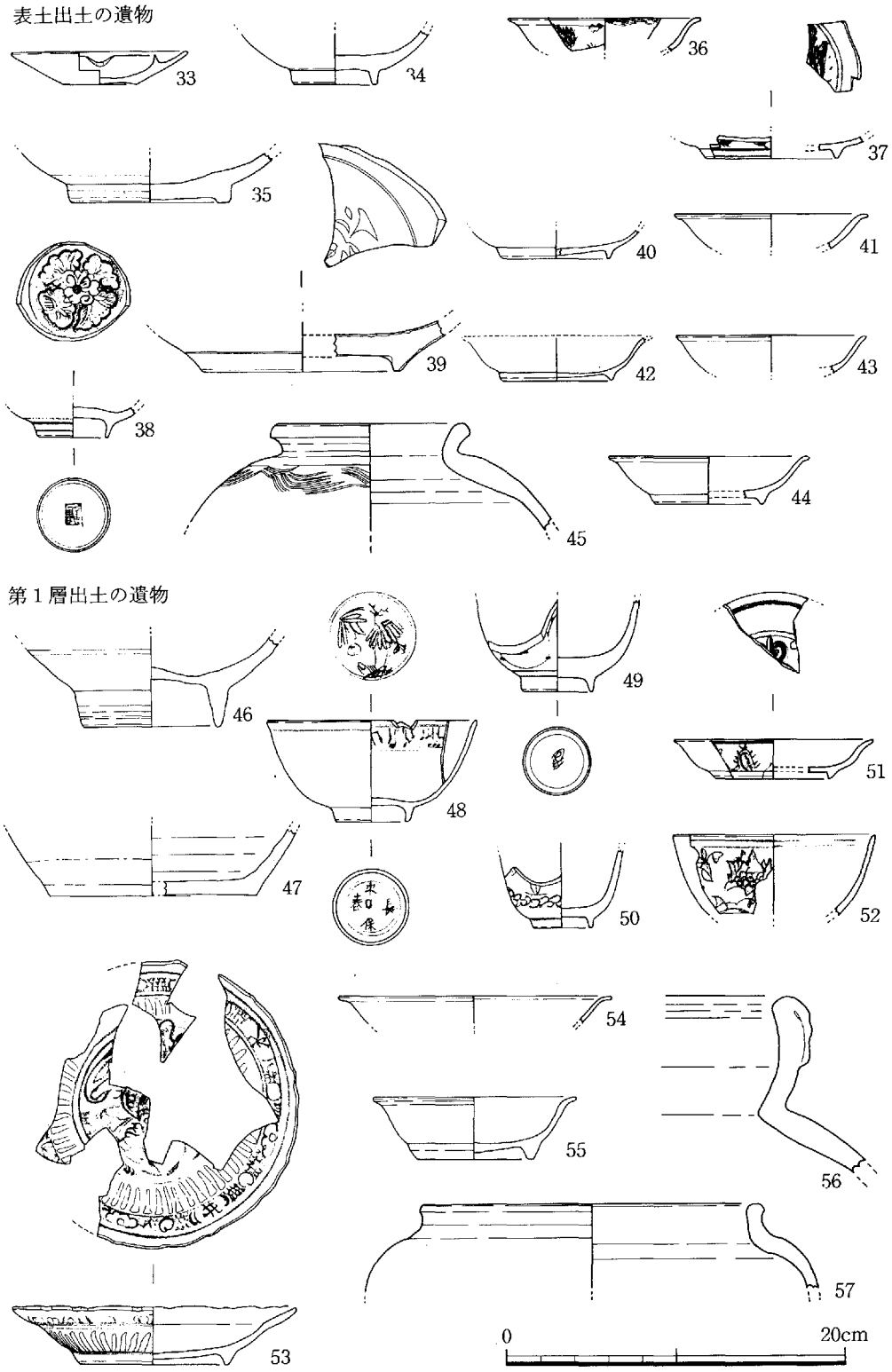
c．SK-02出土の遺物　前述したように本土坑は天正の兵火によると思われる焼土により埋まっていたもので、出土遺物が多く、時期的にも安定した様相を呈するものといえる。このうち(58・59)は、中国製の染付けの皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がるタイプで、16世紀でも後半の製品といえよう。(60)は中国製の白磁の皿である。灰白色を呈し、畳付け部に砂の付着が認められる。

(61)は瀬戸の褐釉の広口小壷である。内面と外面体部下半まで黒緑色のガラス質の釉が施されている。胎土は灰色のややパサついた土である。(62～65)はいずれも備前の製品である。このうち(62)は灰色を呈し、ややナデ肩で、体部下半を欠くがおそらく櫛描きによる文様などは施されていないものと思われる。(63)は肩部に櫛描きによる粗い波状文が施されている。頚部は短く直立気味に立上り、口縁部は丸くやや外に開き気味に納めている。(64・65)は鶴首徳利で、(64)は灰色だが、(65)茶色を呈し、暗黄色の胡麻釉がかかっている。(66～68)は土師質の皿である。赤橙色を呈し、胎土にはクサリ礫が少量含まれている。(69)は型抜きによって造られている泥仏である。この種のものはこれまでの調査においても何点か出土している。(70)は泥岩で、加工痕があり、おそらく硯であったものと考えている。(71)は銅製品で、装飾品の一部と考えられるが全体は不明である。

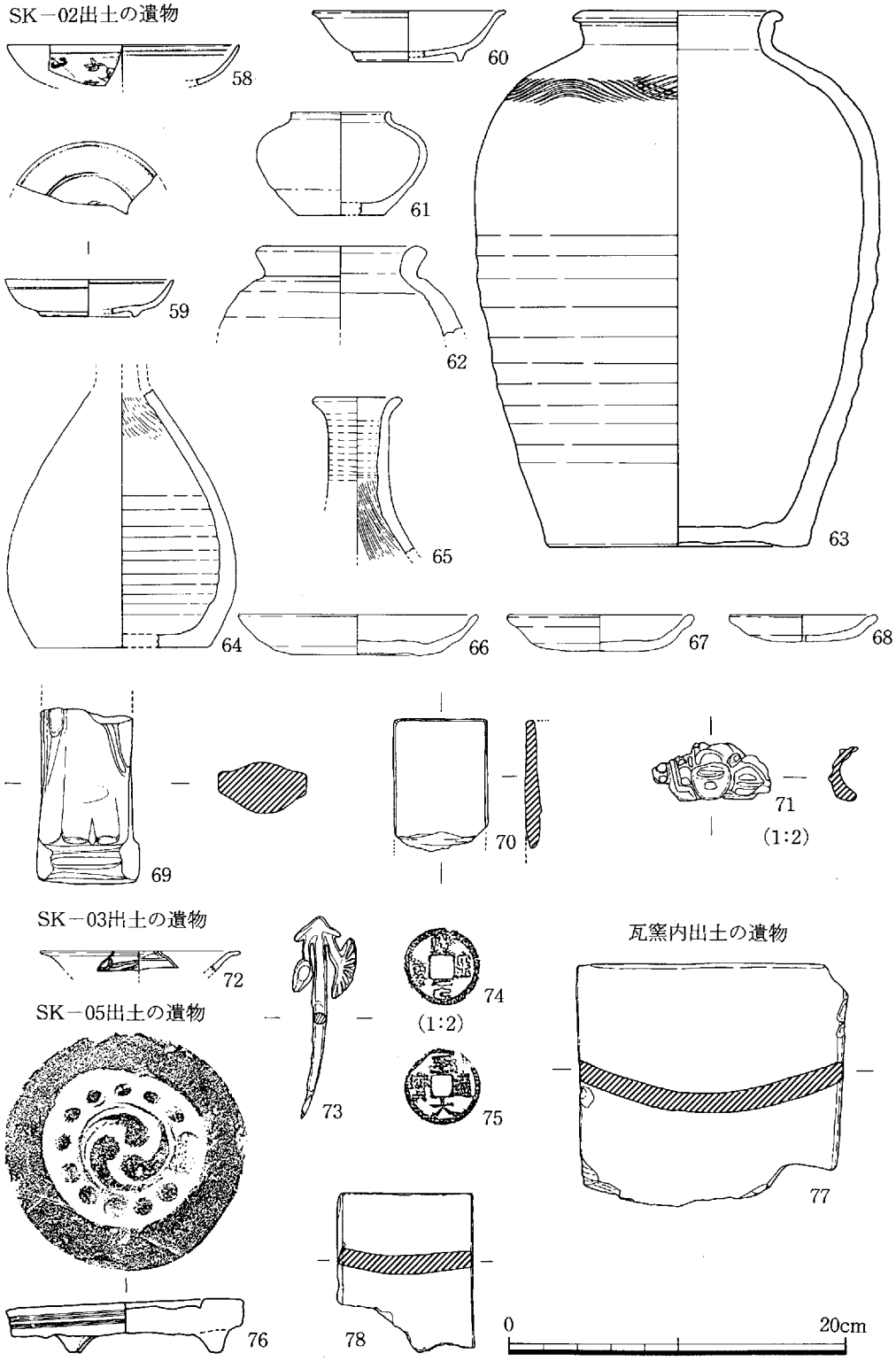
d．SK-03出土の遺物　(72)は中国製の染付けの皿である。(73)は銅製品であるが、その用途については不明である。

e．SK-05出土の遺物　丸瓦の瓦頭部の裏側に簡単な三足を取り付けた製品である。道具瓦の可能性も考えられるが、作りが極めて雑であり、鍋敷などに転用することを目的として焼かれたものではないかと思われる。5個体ほど同じものが出土している。

f．瓦窯出土の遺物　(77・78)はともに平瓦で、茶灰色を呈し、焼成はやや甘い。



第10図　II区出土遺物実測図(1)



第11図　II区出土遺物実測図(2)

3．Ⅲ区の調査

Ⅲ区は、前述のⅠ区の南側、大規模農道をはさんである池（名前はとくについていない）とその北畔部に相当する地区である。

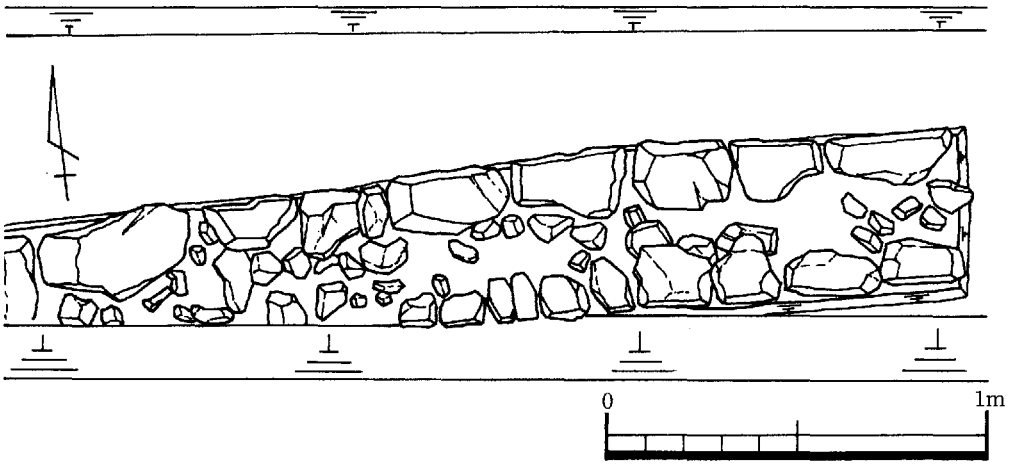
当初、この池についても調査の対象と考えていたが、池内に堆積しているヘドロが最深部で1m以上もあることがわかり、さらに涌水が激しいことから池そのものの調査は断念した。このため、池の北畔部に長17m、幅1mのトレンチを設定し、この部分での遺構の有無、その時期を調べるとともに、このトレンチから池に直交するかたちで何本かトレンチを設け、池との関係を探ることとした。

なお、池については、第15図として掲載したように平板測量によりその概要を記録した。それによれば、池は東西約27m、南北約19mを測る不整形な長楕円を呈し、その中に東西約20m、南北約9mの中島を配している。この中島には東側と北西隅から渡れるように片岩の延石によって架橋されている。中島の頂部は池の護岸の最上部から2mほどの高さを有し、現在ではこの部分に小さな祠ふうの社を祭っている。

A．遺　構

調査区にひっかかるかたちで、東西方向に延びる土塀の基礎となる石積みを検出した。この土塀の基礎は、幅約50cmを測り、高さ約20cm、石で一段分が残っていた。長さについては6mを確認しているが、その延長方向に設けたトレンチでは痕跡すらも確認できなかったことから、この土塀は屋敷地などを囲繞するものではなく、限られた部分の目隠的な役割を担っていた短かなものと考えている。

基礎となる石もやや不揃いで、作りも雑な感がある。基底部の乗っている土から近世の遺物が出土しており、この土塀は18世紀以降の造作と判断される。また、検出面は隣接する池の肩のレベルより一段低い。



第12図　土塀基礎実測図

池との関連について言えば、直交して設けたトレンチの土層の観察からも池はこの土塀よりさらに新しい時期ものと考えられる。

従来、この池についてはその形態・外観から中世、室町時代までさかのぼる可能性が考えられていたが、今回の調査で見る限り再考の必要があろう。事実、根来寺の中世の様相を伝えているという古絵図、さらには近世の様相を描いた絵図にもこの池はまったく描かれていないわけで、その意味ではこれらの絵図は調査結果に整合するものと言えよう。

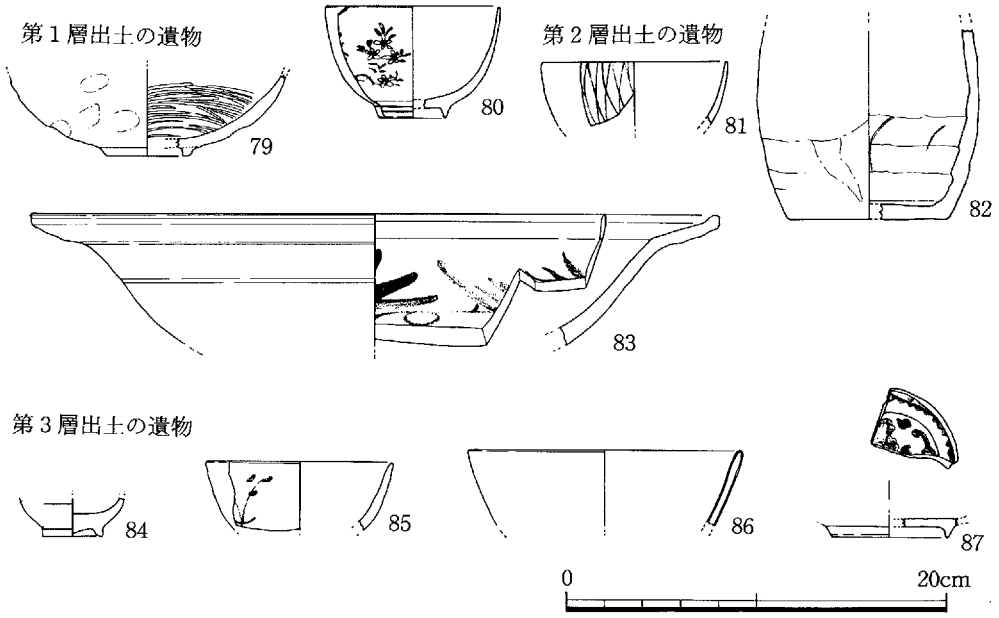
B．遺　物

Ⅲ区においては、遺構より出土している遺物はなく、すべて包含層からである。包含層は３層に大別できるが、混入と思われる古い時期のものも若干含まれるものの基本的には近世のものと言える。

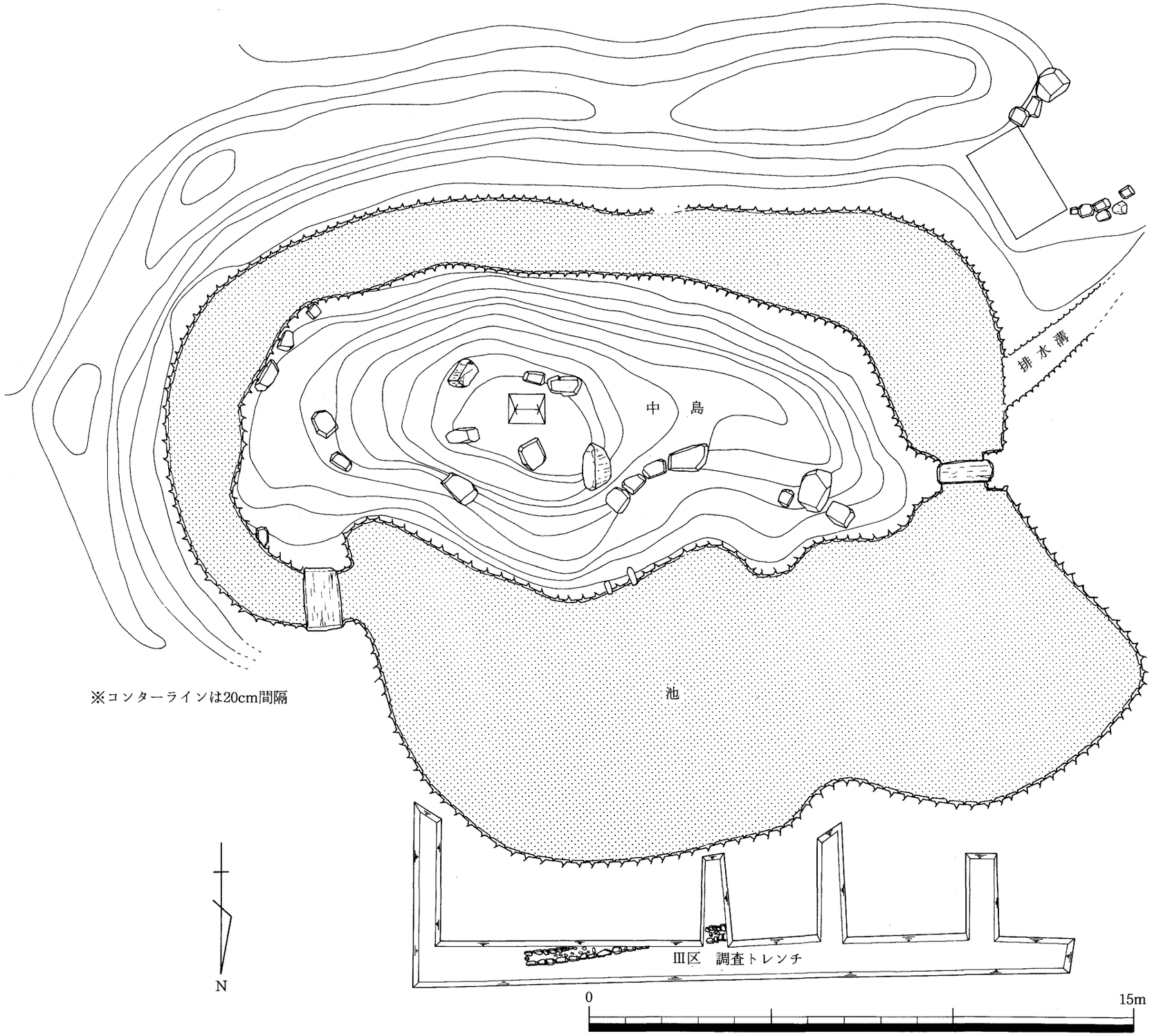
a．第１層出土の遺物　(79)は瓦器碗である。体部内面に幅1㎜ほどの暗文がまばらに施されている。高台は低く、断面台形状を呈している。13世紀中頃のものと考えられよう。(80)は瀬戸の染付け碗である。体部に明るい発色により草花文が描かれている。

b．第２層出土の遺物　(81)は伊万里の染付け碗である。体部には一重の網目文が描かれている。(82)は陶器の壷で、粘土紐を巻き上げて作っている。(83)は唐津の大皿である。

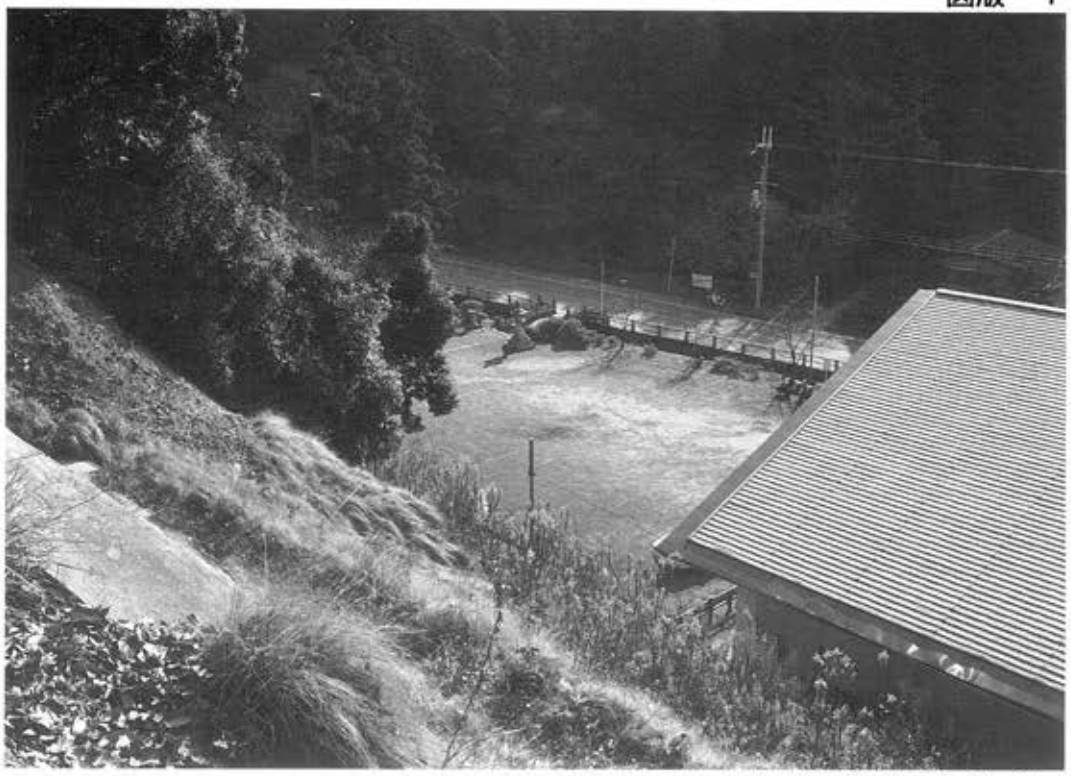
c．第３層出土の遺物　(84)は瀬戸の染付けの小坏である。(85)は伊万里の染付け碗で、底部に草花文が描かれている。(86)は中国製の青磁の碗である。淡い緑色を呈し、無文である。(87)は中国製の染付けの皿である。口縁部が外反するタイプと思われる。



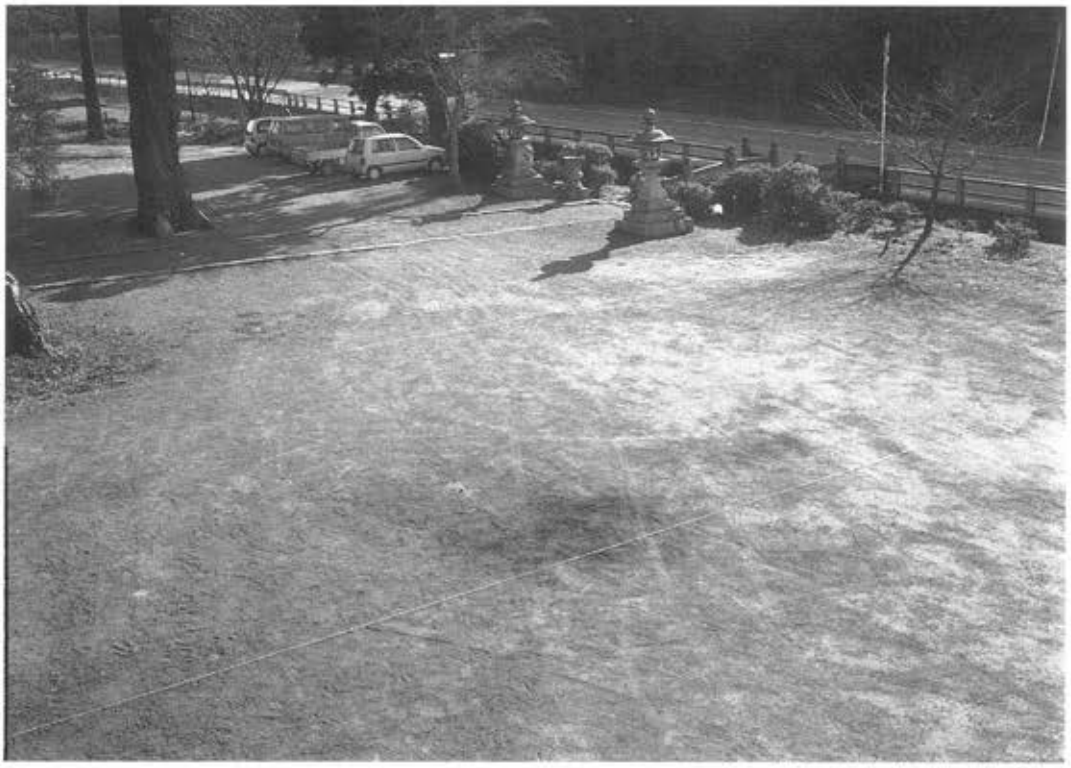
第13図　Ⅲ区出土遺物実測図



第14図　Ⅲ区池平面実測図

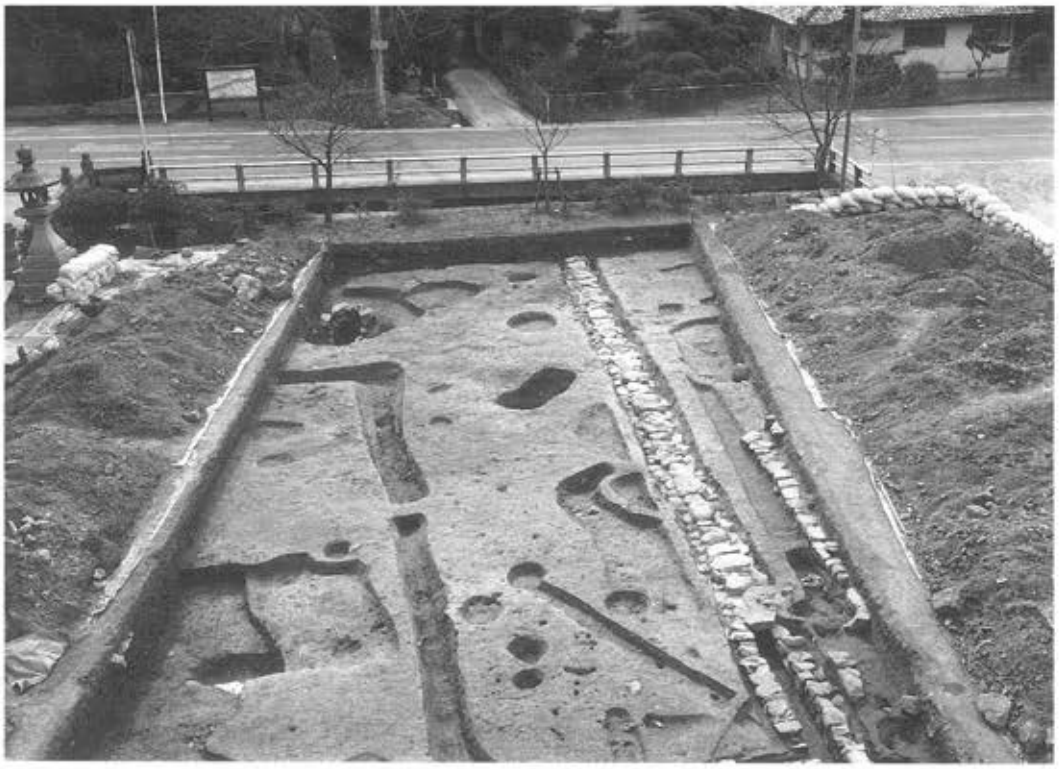


1．Ⅰ区　調査前遠景（北東から）

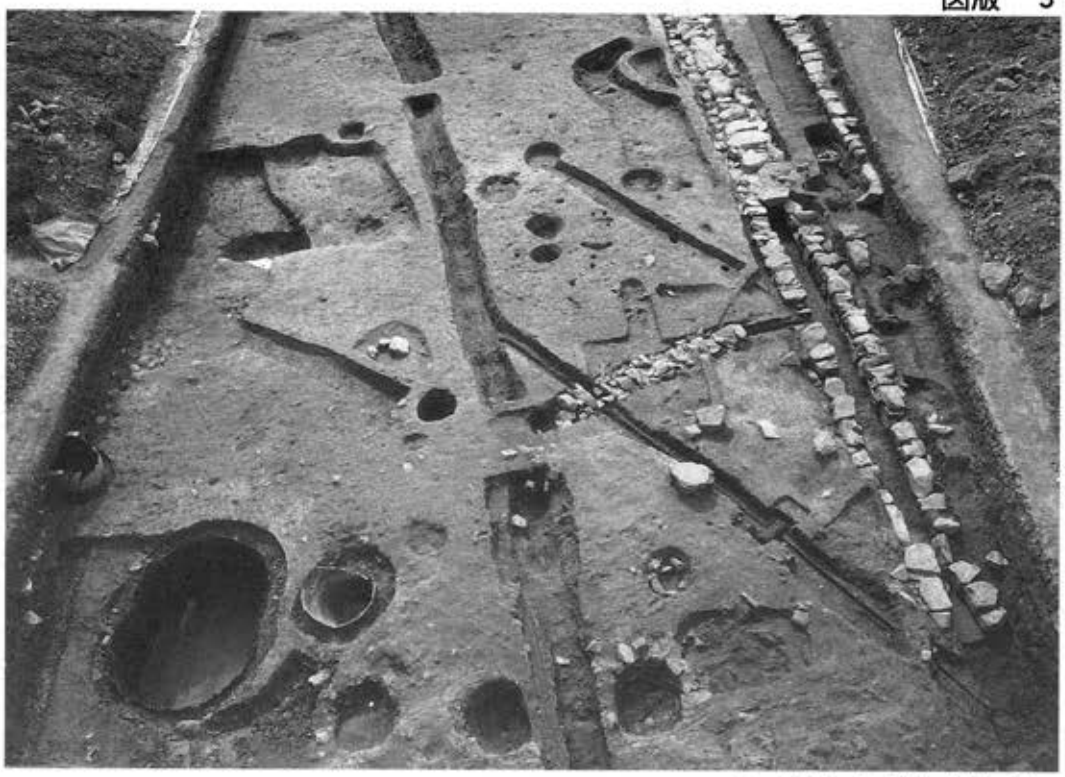


2．Ⅰ区　調査前（北東から）

1．Ⅰ区　全景（南から）



2．Ⅰ区　全景（北から）



1．Ⅰ区　中央部（北から）

2．Ⅰ区　SD-16・SD-25（南から）

1．Ⅰ区　SD-06（南から）

2．Ⅰ区　SE-01（北から）

1．Ⅰ区　埋桶・埋甕（西から）

2．Ⅰ区　埋桶（北から）

1．II区　調査前（北から）

2．II区　調査前（南から）

1．Ⅱ区　全景（北から）

2．Ⅱ区　SK-02（北東から）

1．II区　SK-02細部（南から）

2．II区　SK-08（東から）

1．II区　SV-01（西から）

2．II区　SV-02（南西から）

1．II区　瓦窯（南から）

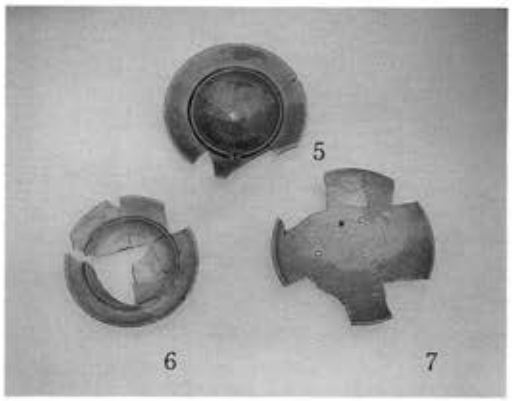
2．II区　瓦窯（西から）

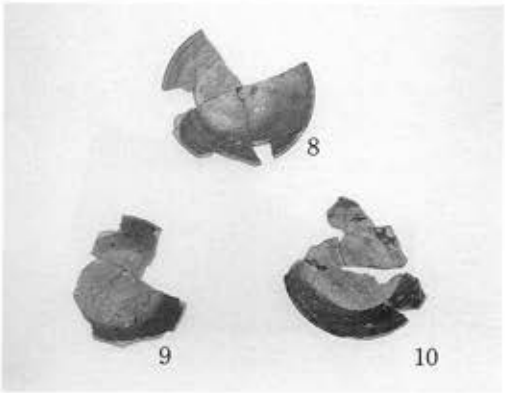
1．Ⅲ区　調査前（東から）

2．Ⅲ区　全景（東から）

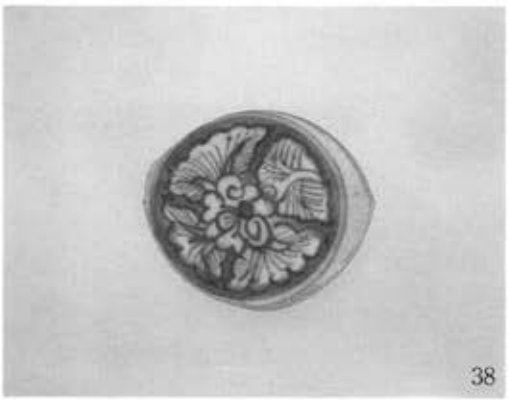
1．Ⅲ区　土塀基礎物（東から）

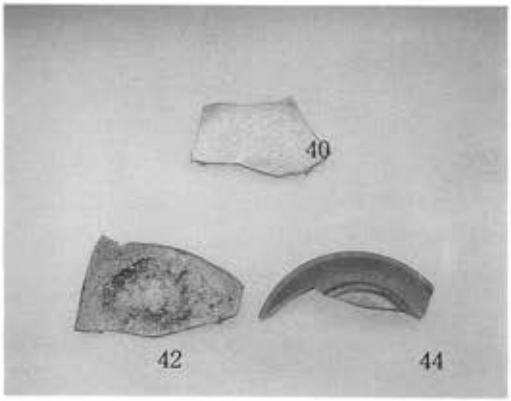
2．Ⅲ区　北壁土層（南西から）



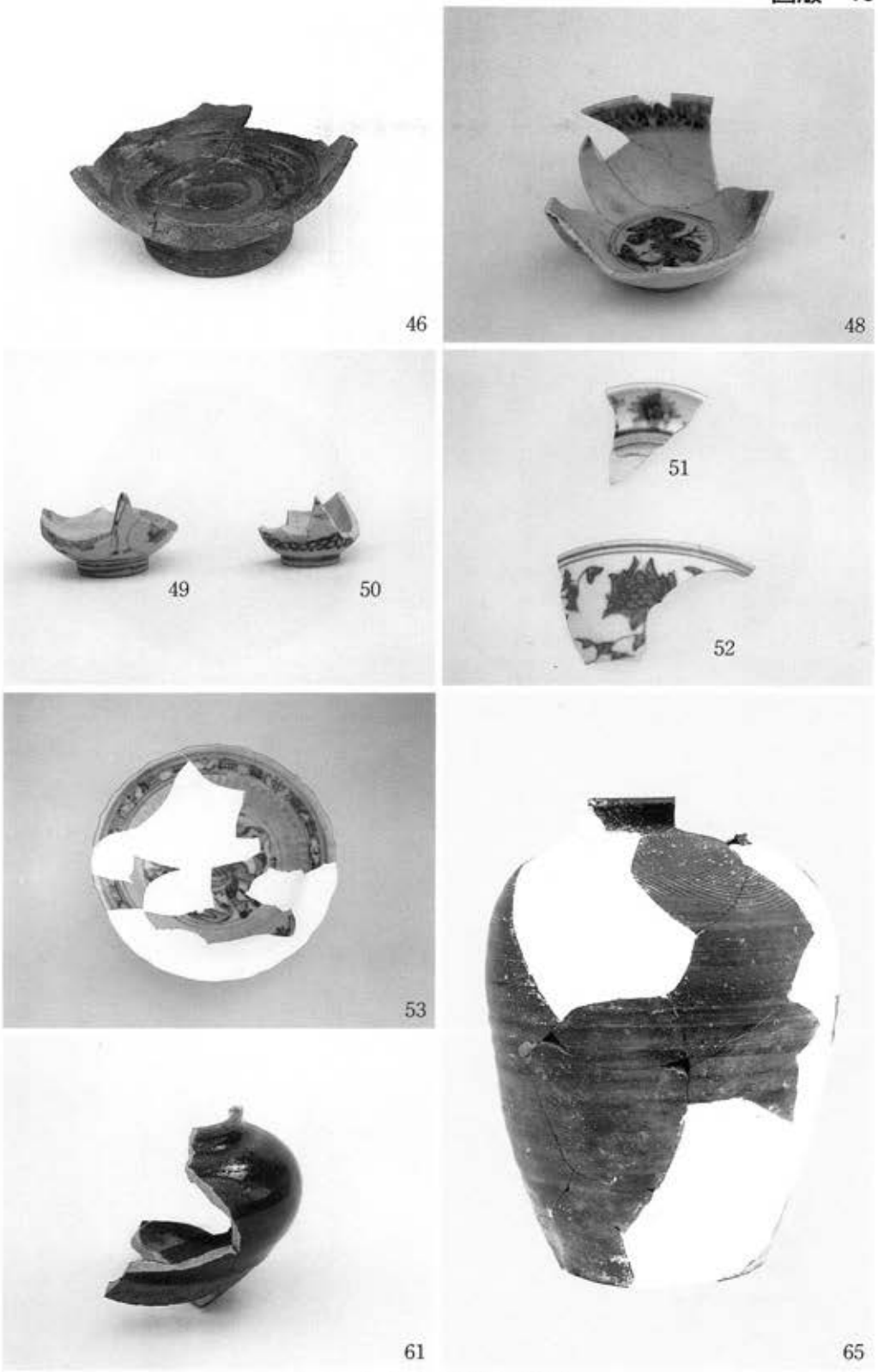


Ⅰ区　包含層・遺構出土遺物

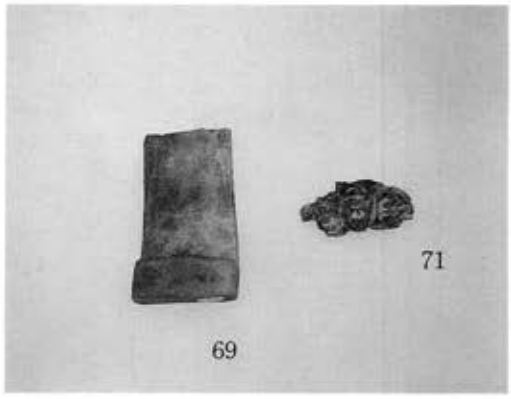


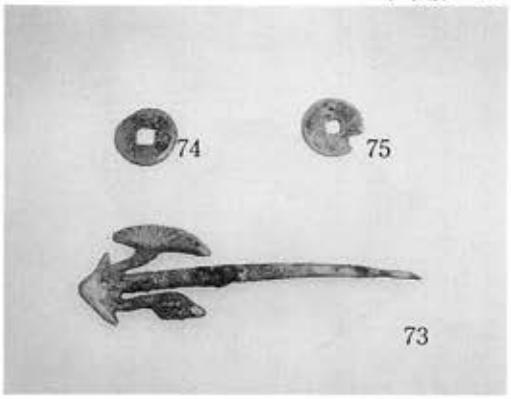


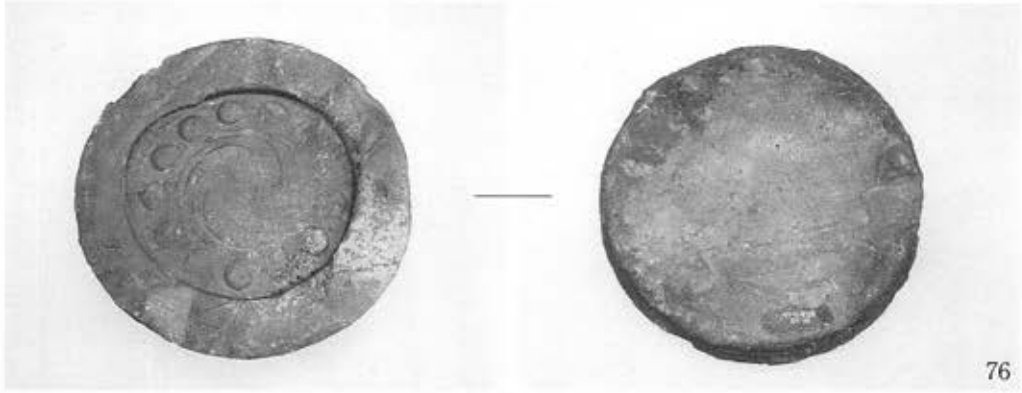
Ⅰ・Ⅱ区　包含層・遺構出土遺物

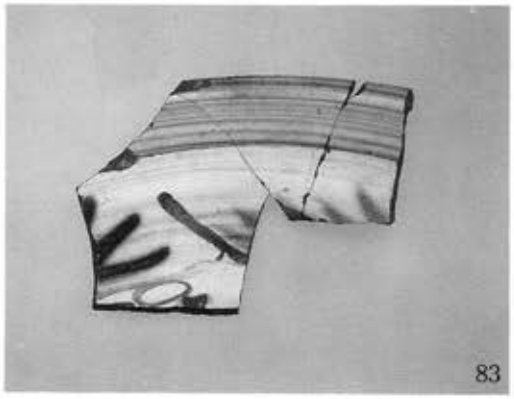


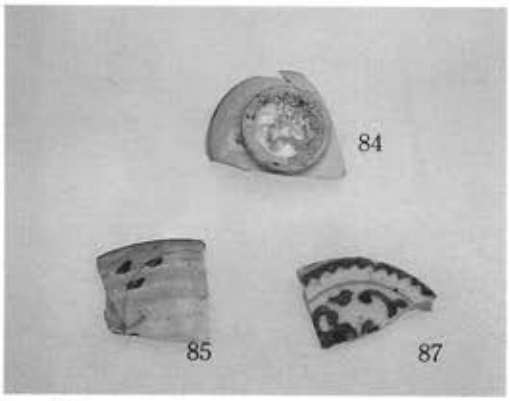
II区　包含層・遺構出土遺物











II・III区　包含層・遺構出土遺物

根来寺坊院跡

1994・3

編集 ㈶和歌山県文化財センター
発行 和歌山県教育委員会
㈶和歌山県文化財センター
印刷 西岡総合印刷株式会社